



合同慰霊祭当日の靖国神社社頭



祭文奏上 島村宜伸会長

平成30年7月7日(土) 正午より、靖国神社において、当協議会及び当協議会参加慰霊諸団体の合同主催による「平成30年度大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」が、ご来賓、協議会参加慰霊諸団体代表、賛助会員等168名の参加を得て、厳粛かつ盛大に斎行された。平成17年7月7日が当協議会設立の日である。爾来、毎年、7月7日に最も近い土曜日を選んで本合同慰霊祭を挙行しているが、丁度7月7日に当たった挙行は久しぶりの快事である。ちなみに土曜日挙行に拘る理由は、慰霊諸団体のお手伝いの皆さんが集まり易い日、加えて慰霊祭一般参加者の大勢が参加し易い日として土曜日の挙行を初代会長瀬島龍三氏が強く主張し、爾来、7月7日に近い土曜日挙行が踏襲され

ているものである。
なお7月7日は、奇しくも昭和12年の同日、盧溝橋事件勃発、即ち日支事変勃発の日である。昭和16年12月の対米英蘭戦開戦直後、「今次の対米英蘭戦及び今後の情勢の推移に伴い生じることあるべき戦争は、支那事変を含め大東亜戦争と呼称する」との閣議決定がなされているが、「支那事変を含め」とするこの文脈に因る限り、7月7日こそ大東亜戦争開戦の日と言えなくもない。初代会長瀬島氏が拘った「7月7日」丁度の日には本年の「大東亜戦争」全戦没者合同慰霊祭を挙行出来たことは、そういった諸々の思いの丈も籠め、誠に意義深いものがある。
また、当協議会の設立は当時、戦後60年の間、営々と戦没者慰霊活動に携わってきた戦友会、遺族会などの諸団体がそれぞれ高齢化し、後継者も見つからぬままに解散の危機を迎えつつあ

平成三十年度
大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭



題字揮毫・故 瀬島龍三氏

第44号

公益財団法人 大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

〒102-0073 千代田区九段北3-1-1
靖国神社遊覧館内・地階

電話: 03 (6380) 8943
FAX 03 (6380) 8952
<http://ireikyou.com>
振替口座 00140-6-334930

編集人 圓 藤 春 喜
発行人 イ 藤 隆
印刷所 ヲダ印刷株式会社

目次

平成30年度合同慰霊祭斎行 1
ペリリュー島作戦と慰霊 5
平成29年度硫黄島戦没者遺骨 8
収集派遣(第4回)に参加して 10
ハワイ明治会の活動紹介 11
グアムに鎮魂社ができるまで 13
事務局からの報告

13 11 10 8 5 1

祭文

平成の御世最後となります平成三十二年大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭を挙げるに当たり、戦没者慰霊諸団体を代表して、謹んで全戦没者の御霊に慰霊の言葉を捧げます。

過ぐる大東亜戦争においては、多くの皆様、祖国と同胞の安寧を願ひ、アジアの解放と繁栄を実現すべく、北は酷寒不毛、南は酷暑瘴癘の地に赴き、勇戦敢闘して散華されました。その数二百三十数万余柱に及びます。

家族を故郷に残し、散って逝かれた皆様方のご無念と、ご遺族の悲痛に思いを致す時、今なお万感胸に迫るものがあります。

今日の我が国国民が享受する豊かで平和な生活と、アジア諸民族の独立と発展は、皆様方の献身が礎石となつて築かれたものであることを忘れることはできません。

しかしながら、平和と繁栄が続いた七十有余年の長い歳月の経過の中で、戦没者に対する国民の慰霊と感謝の思いが風化しつつあることが憂慮されま

す。

追悼と感謝の誠を捧げてこられた両陛下の間近きご退位に思いを馳せ、年月の経過とともにこの風潮がやや増すことが懸念されます。

また、先人が遺された我が国古来の伝統的美徳に無関心の世代が増えるにつれ、人倫に悖る行為が多発するともに、戦後の日本の復興を支えてきた世界に冠たる基幹産業においてすら不祥事が多発するなど、国民道義の頹廢が懸念される状況にあります。

一方、北朝鮮の非核化を巡り、初めての米朝首脳会談が実現しましたが、何ら具体的な成果は無く、今後の北朝鮮の動向等我が国を巡る安全保障環境は、これまでも増して予断を許さないものがあります。

また、中国の軍事力を背景とした覇権主義的行動の増幅、イラン核合意からの米国の離脱による中東情勢の不安定化等、国際情勢は益々複雑流動化しつつあります。

私も大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会は、戦没者慰霊諸団体と相携えて、戦没者慰霊事業の永續と、それを通じての国民道義の作興に寄与することを目的としております。

今こそ、大東亜戦争の国難に敢然と

立ち向かわれた皆様方の勇氣と献身を、そして生き残った戦友が皆様のご加護を得て懸命に成し遂げた戦後の奇跡の復興を思い起こし、先人から託されたこの美しい国の立て直しに邁進すべく覚悟を新たにするものであります。

また、未だご帰還を果たされていない戦没者のご遺骨のご帰還についても、遺骨収集事業に携わる体制の一員として、お一人でも多くの方々に故国にお帰りいただけるよう全力を尽くします。

平成三十年七月七日

戦没者慰霊諸団体を代表して

公益財団法人

大東亜戦争全戦没者

慰霊団体協議会

会長 島村 宜伸

る状況を憂え、このままではこの国の戦没者慰霊が途絶えてしまふじやないか、との危機感から、瀬島龍三氏以下の有志が発起人となり、全国の戦友会・遺族会などの戦没者慰霊諸団体を糾合した「連合会」の設立を模索したものである。しかしながら各論紛糾して「連合会」結成の纏まりがつかず、当面、諸団体の「緩やかな連合体」、即ち「慰霊団体協議会」を創設すること

で、平成17年7月7日に発足したものである。そして、その事業項目の第一が「合同慰霊祭の実施」であった。

従つて、本慰霊祭は、協議会設立の当初から、「協議会」の趣旨に鑑み、協議会に参加する慰霊諸団体全団体が等しく主催団体となり、合同して慰霊祭を挙げる形をとっている。

本年もその趣旨を体し、慰霊祭当日の朝早くから、多くの参加団体の役員等が参集し、準備・受付・案内等の合同作業に、折からの炎暑の中、共に汗を流していただいている姿は、当協議会存立の象徴的意味合いとして誠に意義深いものがあつた。

とりわけ毎年の例にならない、JYMA日本青年遺骨収集団の若い男女学生達が大挙して応援に駆け付け、会場準備・案内・受付などに、きびきびと元氣一杯活動してくれ、参拝者の多くに

感銘を与えた。巷に軽佻浮薄な若者がたむろするこの時代、JYMAの学生達の真摯な奉仕の姿こそ、戦没者の御霊に捧げる何よりの供養と考える。

今夏の異常気象続きで、本慰霊祭当日も西日本地域は記録的豪雨の真只中。日々伝えられる洪水・土石流災害の惨禍の報道を聞くにつけ心痛むものがあつた。しかしながら、被災者の方々には申し訳ないが、本慰霊祭の靖国社頭は、奇跡的に当日のみが梅雨の合間の晴天に恵まれた。これも戦没者の御霊のご加護かと感謝申し上げる次第である。



受付で活躍するJYMA学生

式典

式典は正午12時に開始された。トラペットの伴奏(堀田和夫・ともみ氏)により、全員起立して国歌を斉唱した後、神職による修祓の儀、献饌の儀、祝詞奏上と神儀が進められ、祝詞においては、夫々の団体の戦没者への思いを籠めて、協議会参加46団体の団体名が奏上された。

次いで、島村宜伸協議会会長が協議会参加の戦没者慰霊諸団体を代表して、別掲のとおり祭文を奏上したが、その中で特に、本年は、平成の御世の最後の慰霊祭にあたり、国民に率先して戦没者に追悼と感謝の誠を捧げて来られた両陛下の間近き、退位に思いを致し、戦没者に対する国民一般の慰霊と感謝の念がともすれば風化しつつある今日、我々一同、これまでも増して戦没者慰霊活動の作興に邁進すべき覚悟の程が披瀝された。

加えて、先人の残された我が国の伝統的美徳に反し、人倫に悖る行為の多発、また世界に誇る日本の基幹産業においてすら不祥事が多発する現下の風潮を憂え、戦没者慰霊の活動を通じて国民道義の作興に寄与せんとする協議会設立の趣意を改めて思い起こし、覚悟も新たにこの国の建て直しに邁進することを戦没者の御霊の前にお誓い申し



式典に臨む各団体代表

上げ、在天の御霊の一層の御加護と指導を乞い願った。

次いで奉納演奏に移り、本年初参加の世田谷男声カルテット「ガバーガバ」の皆様(企画指導・大穂孝子氏)による「遙かな友に」「ふるさと」の2題が奉唱され、美しい男性四重唱のハーモニーが、参列者の心に沁みわたった。

奉納演奏の後段は、参列者一同、戦没者に思いを馳せて、トラペットの伴奏で「同期の桜」「海ゆかば」を合唱した。雄々しく戦場に散って逝かれた戦没者に思いを馳せる参列者一同の



奉納演奏 世田谷男声カルテット「ガバーガバ」

大合唱の声が神苑に飮した。

終わって、参列者一同は、本殿に昇殿参拝し、各慰霊団体代表者の玉串奉奠に合わせて拝礼した後、「国の鎮め」のトラペット吹奏の中、しばしの黙祷で戦没者奉慰の誠を捧げた。

なお、本慰霊祭に際し、靖国神社には出向けないが、在宅のまま遙かに靖国神社に向かい奉拝したいとの申し出と共に玉串料をお寄せいただいた、いわゆる「在宅参拝者」が、今年も国内外合わせ77名を数えた。慰霊祭において、「祭文」と共に神前に奉納する



トランペット演奏 堀田和夫・ともみ父子

「参拝者名簿」には、今年も、この在宅参拝者を含めた245名の名簿をご奉納申し上げた。

直会

式典を終えて、参列者一同、靖国会館に移動し、一階の会場「九段・玉垣・田安の間」において、13時30分から、ご来賓、参加各団体代表、賛助会員等110名が参集して直会が執り行われた。

直会はず、当協議会園藤専務理事の開会の辞に始まり、同理事の司会によって進められた。

当協議会を代表して島村宜伸会長が挨拶に立ち、本日の合同慰霊式典が、滞りなく、厳粛かつ盛会裡に終了でき



挨拶 島村宜伸会長

たこと、齋行に当たり、参加各団体から受けた絶大なご支援・ご協力に厚く感謝の意を表するとともに、今後とも戦没者慰霊事業の永続のため、一層のご支援を賜りたい旨の挨拶が述べられた。

次いで、ご来賓の靖国神社村田信正権宮司から、日頃の靖国神社崇敬奉賛に各団体から寄せられている協力・支援に感謝の意が表されると共に、最近の靖国神社の状況、間もなく始まる今年のみたま祭りの準備状況等について報告があり、とり



挨拶 村田信正靖国神社権宮司



挨拶 山谷えり子参議院議員

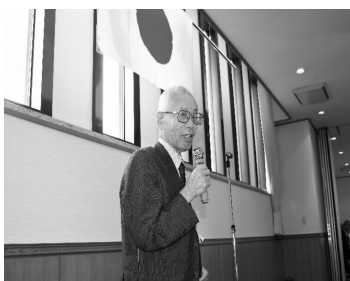
わけ靖国神社御創建百五十周年記念事業の一環として進められている外苑整備の進捗状況、みたま祭にしばらく中断していた夜店を復活する企画などが詳しく紹介された。

引き続き、山谷えり子参議院議員、館本勲武デリカフーズホールディングス(株) 会長からご来賓としてのご挨拶を頂戴した。館本会長は、比叡山において大々的な大東亜戦争戦没者慰霊法要を私財をなげうつて齋行されており、この度ご縁を得て、当協議会の賛助特別会員にご加盟いただき、本慰霊祭にもお招きしたものである。

次いで、本日参列の協議会参加慰霊団体各代表の紹介と、水落敏栄日本遺族会会長、佐藤正久・宇都隆史両参議院議員からの慰霊電報の披露があった後、参列慰霊団体を代表して東部ニューギニア戦友遺族会会長堀江正夫氏が、103才とは思えない矍鑠たるお姿で登壇され、ご挨拶を兼ね献杯のご発声をされた。ご挨拶の中で、13年前に当協議会を立ち上げられた初代会長瀬島龍三氏、名誉総裁三笠宮崇仁親王殿下の戦没者を思う熱い思いに触れられ、今日、後を引き継いでいる私ども一同、その負わされている期待の大きさと責務の重大さに肅然と襟を正す思いであった。

その後、和やかな雰囲気の下に、懇談会食は約1時間に及び、戦没者慰霊にかける思いを等しくする仲間同士、お互いの慰霊活動の有り様を伝え、喜びや悩みを披露し合い、なかには思わぬ思い出話に花が咲いたりして、意義深い懇談のひとつ時を過ごした。

最後は、堀田和夫・ともみ両氏のト



挨拶 館本勲武デリカフーズ(株)会長

ランペット吹奏に合わせ、戦没者を偲び、全員で「海ゆかば」を声高らかに斉唱した後、英霊にこたえる会会長寺島泰三氏のご挨拶とご発声による献杯で、会は締めくくられ、司会者の閉会の辞と共に一同、名残を惜しみつつ解散した。

毎年、この慰霊祭にお集まりの皆様顔ぶれも、代替わりということか、少しずつ新旧交替が進んでいる。新しい仲間が戦没者慰霊活動に加わり、新しい世代が戦没者慰霊に関心を持ってくれること、それこそ私どもの望むところである。直会での老若男女、あるいは戦争を知らない世代と戦争を経験



献杯 城工大東部ニューギニア戦友・遺族会会長



献杯 寺島泰三英霊にこたえる会会長

した世代など、それらが打ち解けあつての互いの屈託ない語り合いの様子を目の当たりにして、戦没者慰霊活動の今後に光明を見出したのは、私だけではないだろう。

(柚木文夫記)

その1 作戦準備

和泉 洋一郎

ペリリュー島は、現在のパラオ共和国諸島南部に属し、珊瑚礁に囲まれた南北9km、東西3km、面積20km²ほどの島嶼であり、ほぼ硫黄島の大きさに匹敵する。中央部に標高90mの大山があるものの、全体として平坦な島である。第1次世界大戦勃発とともにドイツ領から日本領となり昭和20年(1945)までの31年間日本の統治下にあった。日本人がパラオ発展のため尽力したため、今もつて親日の人が多い国である。大戦時には東洋屈指と云われた1200m級滑走路2本が稼働していた。このことが戦いの場となった大きな要因となった。昭和18年(1943)に

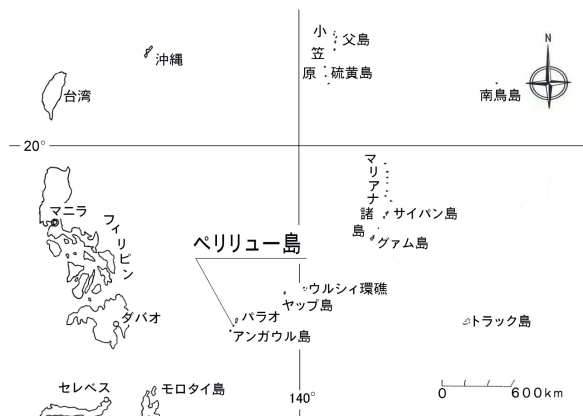
ペリリュー島作戦と慰霊

「忘れられた島」ペリリュー島が、天皇陛下の御言葉によって「決して忘れてはならない島」となった。

戦後70年の節目にあたる平成27年4月に戦没者慰霊のためご訪島された陛下が「このような悲しい歴史があったことを、私も決して忘れてはならないと思います」と述べられたからである。悲しい歴史とは如何なるものであったのか。忘れてならないのは何なのか。それを考えてみるための一助としたい。

は日本人160名、島民900名が住んでいたが、現在の住民は500人程度と云われている。戦後米国の統治下にあったが平成6年(1994)に共和国の1州として独立した。

ペリリュー島戦は、マリアナ失陥後の孤島防衛作戦において、水戸歩兵第2聯隊基幹のペリリュー地区隊(約1万名)が、絶対的制空・制海下に強襲



上陸した米第1海兵師団基幹(約3万名)を正々堂々と迎え撃ち、米軍に上陸された昭和19年9月15日から74日間の長期にわたって持久した戦いであつ

た。

それは比島攻略のための航空基地を早期(4日間を予定)に獲得しようとした米軍の企図を挫折させると共に、我に匹敵する損害を与え、昭和天皇から11回にも及ぶ御嘉賞(お褒め)を賜るという偉勲を立てた戦いであつた。

また、対上陸作戦上の特性として、サイパンやグアムで見られた水際撃滅一辺倒だけの作戦ではなく、水際撃滅を追求して、水際陣地での戦闘やそれを支障(しとう)とする反撃を試みるも、不成功と見るや複郭陣地に依る長期持久戦法、次いで遊撃戦闘に転移するという柔軟かつ縦深性ある作戦をとつた。また、時期を失したとはいへ大隊規模の逆上陸も実施された。総じて多彩かつ異彩を放つ戦いであつた。

ここでの戦訓は、じ後の硫黄島戦等で遺憾なく活用され、米軍を大いに苦しめることになった。

一 ペリリュー島の作戦準備

(一) 歩兵第2聯隊ペリリュー島へ

水戸歩兵第2聯隊(以下「歩2」)は、明治7年(1874)に創設された光輝ある伝統を有する部隊である。

その軍旗は大戦時には旗竿と縁取りがあるのみで、西南の役以来の激戦の跡を偲ばせていた。明治41年(190

8)に第1師団隷下から第14師団隷下となり、翌年佐倉から水戸に移駐している。

中川州男大佐が、聯隊長として赴任したのが昭和18年6月10日のことであつた。大佐は、明治31年熊本生まれで陸軍士官学校第30期である。

成績は優秀であつたが陸軍大学校には入らず部隊勤務に精励した。寡黙深慮の士であつた。



中川州男大佐

当時「歩2」は、編成地である水戸を離れ満州永久駐留となり満州中央北部の嫩江(ノンコウ)に駐屯し匪賊討伐を行いつつ対ソ戦に備えていた。

中川聯隊長は「兵の精強は訓練によって成就される。戦闘も演習の継続である」との考えのもと、訓練に明け暮れていた。この時に構築された堅い信頼

関係がペリリュー島作戦で活かされるのである。

そして戦局が逼迫した昭和19年初頭、第14師団(師団長井上貞衛(さだえ)中将)は太平洋正面へ転用されることとなり、「歩2」でもその一環として対米戦への転換教育が行われた。

米軍戦法に詳しい大本営参謀の堀栄三少佐(マッカーサーの参謀と称された米軍通)が派遣されてくるや聯隊長は熱心に研究し対米戦法について理解を深めた。この姿勢もペリリュー島戦において開花することになる。

3月28日、大連を出港した師団は、3隻の輸送船(「阿蘇丸」「東山丸」「能登丸」)に分乗し、米軍潜水艦群が跳梁跋扈する海洋をすり抜け、4月24日パラオに無事上陸することが出来た。

(二) ペリリュー地区隊初期の防御計画

画

「歩2」は4月26日、ペリリュー島に進駐し、「ペリリュー地区隊」となり、3月から同島の守備に任じていた歩兵1個大隊基幹の部隊と交代した。

当時、陣地はほとんどなく、無防備の状態であつた。各部隊の守備地区決定に伴い、まず防空壕の構築に専念、次いで守備陣地の構築に移行した。

配備の重点を南半部及び北部に保持

し、至近距離において短刀火力を發揮して敵を水際に撃滅するとともに、やむを得ない場合に備えて中央高地に砲兵陣地を含む縦深陣地も構築するという構想のもとに、島を東、南、北の3地区に区分してそれぞれ歩兵1コ大隊基幹を配備し、約2コ中隊基幹を予備として、鋭意作戦準備、特に築城を推進した。

中央高地には、天然洞窟を活用した陣地を縦深に構築するとともに地下2階建て方式を追求した。大隊・聯隊本部は地下5mに坑道陣地を構築し、横穴を開けて拡張した。火砲陣地は、山腹に坑道を掘り抜き砲座を設けた。しかもすべての陣地には天蓋をつけるという念の入れようであつた。

しかし、全島石灰岩でしかも石ノミ、ハンマー、ダイナマイト(主としてカーリット使用)等不足のため、築城作業は非常に困難を極めた。築城作業8、訓練2の割合で、7時から19時まで作業を続行し、休日(日曜日等)はなかった。炊事は中隊炊事とし作業能率の向上に全力をあげた。

海上の障害物設置等全般的な防備に力を入れた。築城資材は海軍部隊の方が豊富で、陸軍部隊は三拝九拝して分けてもらったと云う。

その後、5月24日高崎歩兵第15聯隊

第3大隊（大隊長千明武久大尉以下750名）がペリリュー地区隊に増強されたので、中川大佐は同島の配備を東、西、南、北の4地区に区分し、新たに設けた西地区を第2大隊（長 富田保二少佐）に、南地区は歩兵第15聯隊第3大隊にそれぞれ守備させることとし、5月27日12時配備の交代を完了した。

その直後、師団の上級部隊である第31方面軍軍司令官小畑英良（ひでよし）中将の視察を受けた際、水際撃破に徹するべきとの指導を受け、砲兵陣地を含む全ての陣地を水際地区に推進することとなった。

中川大佐は、自らの対米戦法研究に鑑み、当時陸軍中央で採用されていた水際だけで決戦を企図するという水際撃滅戦法では、任務を完遂出来ないことと判断し、水際撃滅を追求しつつも内陸持久も策するという全島を活用した長期持久戦法を、師団長の許可を得て採っていたのである。

それは、上陸してくる米軍の狙いを、フィリピン攻略のための航空基地設定であることを見抜き、自分達の任務は、努めて長期間飛行場設定を阻止・妨害することだと分析していたからである。しかし、陸軍中央の考え方に固執する方面軍司令官によって覆されてしまった。

(三) ペリリュー地区隊の戦備強化

昭和19年7月、絶対国防圏の要衝サイパン島が陥落したことは、その後の戦局を決定づけた。すなわち、大本営はさきに（昭和18年9月30日）帝國戦争遂行上、太平洋及び印度洋方面において絶対確保すべき要域を千島、小笠原、内南洋（中、西部）、西部ニューギニア、スンダ、ビルマを含む圏域とし、万難を排しおおむね昭和19年中期を目途として、米英の進攻に対応すべき戦略態勢を確立しつつ随時敵の反攻戦力を捕捉破砕すべきことを御前にお願いして決定していたのである。

サイパンの失陥に伴い、大本営は絶対国防圏の内域において準備を進めていた比島、台湾、南西諸島、本土、千島にわたる海洋第一線の防備を急速に強化し、右のどこかに敵が来攻した場合、随時陸海空の戦力を結集して反撃決戦を実施しようとして企図した。この計画は捷号作戦計画と呼ばれた。

そして新国防要線における反撃作戦をより効果的にするため、大本営は従来の戦訓に基づき、航空運用、上陸防衛方式、特攻奇襲兵器等について新たな戦術、戦法上の構想を検討したのである。

上陸防禦方式については、サイパン作戦において、従来採用されていた水

際直接配備による上陸防禦方式が一朝にして破れ、島嶼守備に関する全軍將兵の自信を喪失させる傾向を生じつつあったので、大本営は従来の島嶼守備隊戦闘教令の方針を改定し、後退配備による縦深陣地を根本思想とする上陸防禦教令を編纂し、これを全軍に配布した。

捷号作戦計画の策定により、パラオ地区の戦略的地位は比島防衛の前衛地帯に変わることとなった。

師団は、ペリリュー島の急速防備の強化のため、先に歩兵第15聯隊第3大隊（千明大隊）を同島に増強したが、更に同聯隊主力（第1、第3大隊）を同島に派遣し、6月5日から7月2日までペリリュー島南部地区の築城強化作業を支援させると共に、6月30日独立混成第53旅団隷下の在コロール独立歩兵第346大隊（長 引野通廣少佐）をペリリュー地区隊長の指揮下に入れた。

同大隊はペリリュー地区予備隊となり、中ノ台南側及び水府山南東側付近に位置し、各地区への反撃を準備しつつ天山、中山付近の後方陣地の築城強化を実施したが、7月21日18時歩兵第2聯隊第1大隊と任務を交代し、北地区隊となりその防備を継承した。

つまり、中川大佐が当初思い描いて

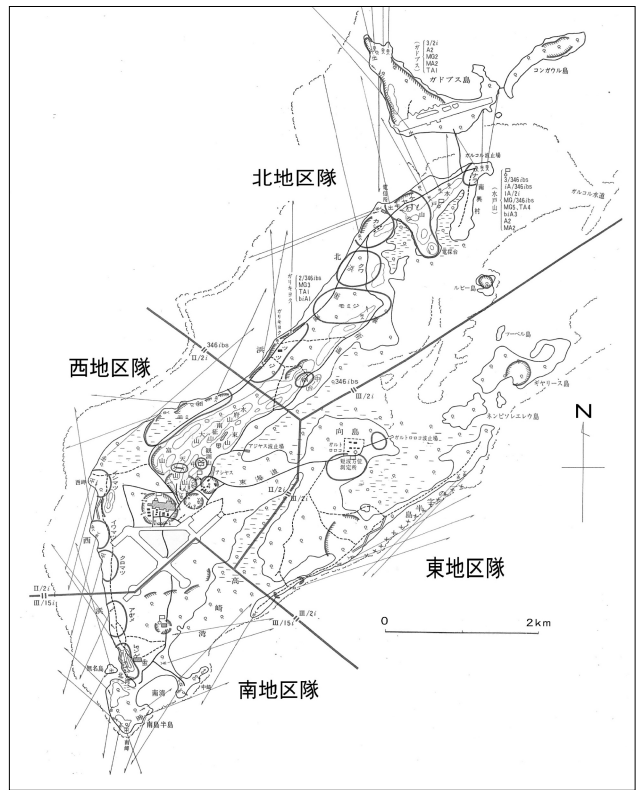
いたように、水際撃滅を追求しつつも全島を活用した長期持久戦法に復元したのである。そして、方面軍の指導により水際付近に推進されていた砲兵陣地を、元来構築していた中央高地の砲兵陣地に再び戻したのである。その際、大きな混乱も無く陣地転換できたのは、まさに中川大佐の慧眼の賜であり、面目躍如たるものであった。

また、師団長は、第14師団司令部付として着任していた陸士第25期の村井權治郎少将を7月16日にペリリューに派遣し、主として師団あるいは現地海軍部隊との連絡・調整に当たさせた。

なにしろペリリューは海軍少将が指揮する航空部隊が所在していた島であり、壊滅的損害に伴い後退した後も、大谷龍藏海軍大佐を長とする約3600名もの部隊が残留していた。御多分に漏れず難儀の多かったことと思われる。陸軍少将が派遣されることにより、中川大佐は作戦戦闘に専念することができるようになった。

(四) 最終ペリリュー地区隊戦闘計画

8月初めペリリュー地区隊長中川大佐は当面の敵情に関し、「南東方面の敵進攻準備は既に完了し、8月上旬以降敵は一举に当正面に來攻する公算いよいよ大」と判断した。そしてサイパンの戦訓にかんがみ、従来の計画を修



最終ペリリュー地区戦闘計画

正して新たにペリリュー地区戦闘指揮
導要領を完成、同島に派遣中の村井少
将は8月4日この戦闘計画を携えて集
団司令部に出頭し、集団司令官の承認
を得て次のとおり決定した。

- 1 地区隊ハ統合戦力ノ最高度發揮ト
積極鋭利弾力性アル戦闘トニ依リ敵ヲ
水際ニ撃滅ス
- 2 敵ノ行動ニ依リ上陸企図、地点ヲ
偵知セハ全力ヲ挙げ該方面ニ対スル準
備ヲ周到ニシ敵上陸ヲ開始セントスル
ヤ予メ準備セルトコロニ依リ隠密奇襲

機先ヲ制シ果敢ナル海上遊撃戦ヲ実行
シ敵ヲ水中ニ撃滅スルニ努ム

- 3 敵上陸ヲ開始セハ過早ニ敵舟艇ヲ
射撃スルコトナク穩忍 至近距離ニ於
テ海上決死攻撃及凡有水中、水際火力、
諸施設ノ威力ヲ統合發揮シ果敢ナル反
撃ト相俟テ瞬時ニ敵ヲ撃滅ス
- 4 敵陸岸ニ地歩ヲ占メントスルヤ直
チニ予備隊及他ノ地区ヨリ転用セル兵
力ヲ以テ斬込、肉攻、特攻、海上戦闘
ト猛烈果敢ナル反撃トヲ敢行シ敵海岸
堡固カラサルニ乗シ手段ヲ尽シテ之カ

撃滅ス
5 状況真ニ已ムヲ得サル場合ハ持久
ヲ策シ高地帯ヲ堅固ニ保持シ敵ノ航空
基地設定並基地利用ヲ妨害スルト共ニ
果敢ナル遊撃戦ヲ展開シ海軍陸戦隊ト
協同シテ敵ヲ殲滅スルニ努ム

ペリリュー地区隊長は敵の来攻を眼
前に控え、前述の戦闘計画及び集団決
勝訓練の指示に基づく徹底具現計画等
により、8月10日から16日までの間、
各部隊を戦闘開始直前の態勢に配備し
て、その激撃準備完成状況を検閲し、
所要の補備修正を実施した。そして引
き続き決勝訓練及び築城等の完成を図
り、8月21日には「敵艦艇、輸送船集
中状況及びリーフの本格的破壊、徹底
せる諸準備等からして、敵は明払曉、
主力をもつて西地区に、一部をもつて
東地区に上陸を開始するものと判断さ
れる。地区隊は明払曉敵の上陸を顧慮
し、第3号反撃準備の周到を期し、敵
撃滅に遺憾なきを期せんとす」との想
定のもとに実兵演習を実施した。

昭和19年8月、グアム島守備隊は玉
砕した。この次は自分たちの番だと覚
悟を決めた中川大佐は全島民を疎開さ
せ、部下将兵と共に眈（まなじり）を
決して米軍を邀撃することになるのだ
ある。(続く)

平成29年度硫黄島戦没者 遺骨収集派遣（第4回） に参加して

つばさ会理事 永田 辰男

一 概要

平成30年1月30日から同年2月15日
にかけて実施された平成29年度硫黄島
戦没者遺骨収集派遣（第4回）に、偕
行社、水交会からの参加者とともに、
公益財団法人大東亜戦争全戦没者慰霊
団体協議会（慰霊協）から派遣される
形でこの第4回収集派遣に参加したも
のである。

二 派遣団の構成

派遣団の総数は30名で、大東亜戦争
全戦没者慰霊団体協議会（慰霊協）か
らは、偕行社からS元師団長と御尊父
が新司領のパイロットで硫黄島の偵察
にも来ていたというN氏の2名、水交
会から元海自の施設幹部H氏、そして
つばさ会から私の4名の構成であった。

三 遺骨収集作業の概要 1 作業内容

壕内外及び地表の遺骨収容作業は、
壕等の底まで手掘りにより土砂を排除
して遺骨の所在確認を行い、発見し
た遺骨の収容を行うこと。

2 作業場所

今回作業を行った場所は、北部の251Vと呼ばれる米国沿岸警備隊のデニスコート跡付近と土日のみ作業が行われた滑走路脇の地下壕の2カ所であった。

3 入間から硫黄島への移動

1月30日(火)、入間市第一ホテルにて結団式及び遺骨収集作業についての説明会が実施された。この日は、入間市第一ホテル泊

1月31日(水)の入間基地から硫黄島への移動は、運良くC-12の初任務飛行機に搭乗、広く、速いので参加者の評判は上々であった。硫黄島到着後、直ちに天山慰霊碑にて来島報告を行う。



慰霊協からの参加者

(左から 私、S氏、団長、H氏、N氏)

4 硫黄島での一日のタイムテーブル
収集団の一日のタイムテーブルは、概ね次のとおりである。

0545	0630	朝食
0720	0730	朝礼、体操
0740	1040	遺骨収集作業
1145	1220	昼食
1330	1540	遺骨収集作業
1655	1720	夕食
1750		ミーティング
2200		(作業報告、翌日作業確認等)
2200		消灯

1 四 現地での遺骨収集作業

251Vの遺骨収集作業

2月1日からの作業は、硫黄島勤務の隊員の参加も得て、ドーザーや重機によって盛り土された土の山の中から丹念にご遺骨や遺品を探す作業となる。作業中、大腿骨や頭部の骨、歯などと共に、ヘルメット、ペン先、小銃及び拳銃弾等も見発見された。

見つかったご遺骨は、作業場で拝礼の後、捧持し慰安室へ安置した。

2月11日(日)の午前には、251Vの奥のまだ掘っていないエリアを調査、細かいご遺骨とコルト45ガバメントが出てくる。米軍から奪った物との意見もあった。

午後、壕入口前を調査、遺族会のメンバーが折重なるように倒れていた2



251Vでの遺骨収集作業

柱のご遺骨を発掘した。

2 滑走路地下壕の遺骨収集作業

2月3日(土) 午後、体力のある若手が滑走路地下壕の調査に向かう。

地下壕にもぐったH氏によれば、壕は屈んで歩くほどの高さであり、壕からは機関銃の弾が見つかった。地下は、暗く、暑く、砂塵が舞う厳しい環境下での作業となったとのこと。

3 資料館見学と島内巡拝

2月6日(火)に、海自と空自の資料館見学の機会が与えられた。

2月8日(木)、島内巡拝を行う。

島内の主要ポイント、発見された地下壕などを訪問し、硫黄島での戦いに思

いを馳せると共に、英霊に対し慰霊参拝を行った。



島内巡拝（摺鉢山山頂にて）

4 離島準備

2月12日(日) 午前中個人の準備。午後、出発時の儀仗受けの予行の後、自由時間があつたので、M氏ら数名と一緒に鎮魂の丘まで散策した。

この日の夜は、海空の基地司令、隊員、鹿島の社員等を交え、鹿島食堂にて懇親会。

5 慰霊祭

2月13日(月) 15時から天山にて海空の指揮官を招いて慰霊祭が実施された。

空自の分屯基地司令は、昨日着任されたばかりだ。団長、島民の会代表等



空自入間基地におけると列 (バス内から)



千鳥ヶ淵墓苑での遺骨引き渡し式

の挨拶に続き、献花。お線香、お水をお供えして厳粛な中に慰霊祭を終えた。

6 離島

2月14日(水)、海自の儀仗隊の栄誉礼を受けた後、海空自衛隊員の見送りを受け、C-1に搭乗。約2時間半のフライトの後、入間に着陸。空自の儀仗隊の栄誉礼を受ける。

ご遺骨は、ターミナルで埼玉県知事の献花等を受けた後、エプロン地区から正門までと列した隊員の見送りを受け、都内の宿舎へ向かった。

ターミナル地区から正門まで続く行列は厳粛なもので、ご遺族から空自に

対する感謝の言葉が聞かれた。

7 硫黄島戦没者遺骨引き渡し式及び解団式

2月15日(木) 1030から千鳥ヶ淵戦没者墓苑にて、高木厚労副大臣をはじめ多くの国会議員、遺族会等の方々が見守る中、硫黄島戦没者遺骨引き渡し式が挙行された。

ご遺族の献花等が終わり、ご遺骨は一時厚労省にて保管される。

この後、有志が連れ立って靖国神社に参拝した。

五 まとめ

今回の第4回收集により16柱を収集

し、第2回收集と合わせ17柱のご遺骨を持ち帰ることが出来た。

今回の収集作業においては、前半、なかなかご遺骨が見つからなかったが、帰京を前にして折り重なるように倒れた2柱のご遺骨を見つけることが出来た。1柱はヘルメットを打ち抜かれており、一人が撃たれたところを助けに行き、狙撃されたものと推測される。

着剣された状態で歩兵銃もその場で見つかり、最終段階における戦いの緊迫した状況がうかがえた。壕の奥には、さらにご遺骨が見えたが、残念ながら今回の収集作業となつた。

硫黄島を巡拝すると、すでにたくさん

の壕が調査され、多くのご遺骨が収集されたことが窺えるが、まだ多くのご遺骨が残されているのも事実。資料によれば、戦没者概数21900名、収容遺骨概数10400柱で、まだ10500柱が未収容の状態にある(平成30年1月末現在 厚労省データ)。

今回、初めて滑走路脇の壕が探索されたことを遺族会の方は大変喜んでおられた。航空機が運航されない土日の作業のみであったが、ご遺骨、弾薬等の遺留品が見つかったことも今後の収集作業に希望が見いだせるものである。

壕の中は暑く埃の舞う厳しい環境であるが、より多くのご遺骨に帰還して

頂きたいものである。

千鳥ヶ淵墓苑で開催された遺骨引き渡し式には、遺族の方々が多数 参列されていたが、多くの方がご高齢で、硫黄島での収集作業に参加されるには厳しいお歳と拝見した。だからこそ、比較的元素な自衛隊OB会等のメンバーが参加する意義があると感じた。作業内容は、その時々で異なるが、年齢・体調等を考慮して作業計画は立てられるので、多くの方に参加して頂きたいと思う。

ハワイ明治会の活動紹介

秋篠宮・同妃両殿下は、「日本人ハワイ移住150周年記念式典」等参加のため、6月4〜9日の間、ハワイを公式訪問され、ハワイ明治会が維持管理している「マキキ海軍墓地」を参拝されました。

両殿下は、4日15時頃「マキキ海軍墓地」に御到着、早瀬会長がこの墓内に建立されている「明治元年渡航者顕彰碑」と明治18年の官約移民以降の全ての移民の方々を祀る「日本人移民慰霊碑」について御説明申し上げた。

次いで、①この墓地が「日本海軍墓地」と呼ばれている由縁、②50年前に非常に荒れ果てていたこの墓地を、当



両殿下を案内する早瀬会長

時のハ
ワイ明
治会の
主体を
占めて
いた、
先の大
戦で勇
名を馳
せた日

系人部隊の除隊者の尽力で、ハワイだけで無く、日本政府をはじめ多くの方々にご支援をいただき修復した事、

③日米両軍の全てのご英霊を敵味方無く、「怨親平等」の心で招魂合祀し、太平洋の永遠の平和と日米の絆を更に強める為に、この「鎮魂」の慰霊碑を建立した事等を説明させていただいた。

説明後、両殿下は、最初に「元年者顕彰碑」に献花され、次いで「日本人移民慰霊碑」に向かわれる折、「鎮魂碑」の前でお立ち止まりになり、深々と頭を垂れて下さったとのことでした。

早瀬会長からは、「このお姿を拝し、涙が出るほど嬉しく、筆舌に尽くせ無いほど有り難く感じた事、英霊をお祀りするのに尽力して下さいました明治会の先人も喜んで頂いて居るものと思っております」とのお便りをいただきました。

(文責 圓藤春喜)

グアムに鎮魂祭ができるまで

戦争を風化させない会

代表 芳賀 建介

一 はじめに

私が戦没者の慰霊祭に関心を持つようになったのは、20余年前にグアムに移住した直後に、北部にある慰霊塔に行った時に始まります。

荒れ果てた慰霊塔と草むした園内に衝撃を受け、以来同士を誘い年2回慰霊塔周辺の草取りをすると共に、仲間と慰霊祭をしている間に、いつしかグアムに戦没者を慰霊する鎮魂社を建て、慰霊祭を実施したいと思うようになりました。

その後、グアムの戦いに従軍し生き残った日米両軍の将兵や戦争を経験した地元民に話を聞いたり、戦史研究や戦跡トレッキングを重ねることにより、グアムでの戦闘の実態を想像できるようになりました。

二 グアム島の戦い

グアム島を含むマリアナ諸島の戦いは、日本本土を守るために設定した絶対国防圏南端の戦いであり、この線が突破されると本土が米軍の長距離爆撃機の脅威にさらされるという重要な戦

いでした。

このため日本軍は、マリアナ諸島の作戦を統轄する第31軍(司令官小畑英良中将)を編成し、サイパン島に主力を配置、グアム島には第29歩兵師団基幹の2万名余の守備隊を配置し、米軍の反攻に備えていました。

これに対し米軍は、圧倒的な海空支援の下、3個師団基幹の5・5万名以上の兵力でグアム島を攻撃しました。日本軍は、善戦敢闘するも、大部分の将兵が戦死して玉砕し、生き残ったのは、横井庄一氏を含めわずか1305名という苛烈な戦いでした。

グアムの戦いに従軍した米軍将校は、「日本人には、恐れという言葉がないのか、彼らは誠に恐れ知らずであった。」と、日本軍将兵の戦いぶりを高く評価しています。

このように日本軍将兵が最後まで結束して戦うことができたのは、マリアナ正面を統轄する第31軍司令官小畑英良中将及びマリアナ地区集団と第29歩兵師団を統括する高品彪中将の優れた指揮統率にあることも知りました。

高品師団長は、絶望的な戦況下で、夜襲玉砕を希望する兵士に対し「徒に生命を弄んではいけない。生命を粗末にするな。お前達は死ぬためにここに来たのではない。祖国を守るために来

たのではないか。祖国ある限り最後まで諦めず戦え」と叱咤したと言います。

それを語るのに肩を震わせ大粒の涙を流しながら述懐していた老兵の姿が私には忘れられません。

そして最後の突撃に先立ち、大本営に訣別電報を打電していますが、「彼ら(兵士)のことをどうか誉めてあげて欲しい。勇気を讃えて欲しい。そしていつまでも彼らのことを誇りに思っていたいただきたい。遺族の面倒を最後まで見て頂きたい」と結んでいます。

グアムの戦いでこれまでに故国に帰還したご遺骨は、700柱程度で、未だ2万柱近くのご遺骨が草生す屍、水漬く屍のまま故国に還るのを待っています。

三 公有地での慰霊祭実施と「戦争を風化させない会」の発足

グアムでの日本人の慰霊祭は、かつては地元民の反響を恐れてか、あまり目立たないように民有地で実施するのが常でしたが、私は5年前に一念発起してグアムの公有地で慰霊祭を実施することを思い立ち、米国政府(グアム政庁)に場所使用の認可申請をしました。

米国政府は、「祖国のために戦死した兵士は英雄ですから、日本人であっても慰霊祭を実施するのは当然のこと



靖国神社神職による降霊祭

です。これまで日本人が慰霊祭を実施しなかったのが意外でした。」と言って気持ちよく許可してくれました。

翌年2回目の慰霊祭を実施する際に、参加者の発案で「戦争を風化させない会」が発足し、初代会長には、国会議員の平沼赳夫様（現在の二代目会長は、高市早苗様）になっていただきました。

慰霊祭は、日本人戦没者の慰霊だけでなく、米軍の戦没者も慰霊するとともに、地元民間人の戦争犠牲者の遺族・親族の気持ちを和らげるため、民間人戦争犠牲者の慰霊祭も併せて実施するようにしました。

四 グラム鎮魂社の創建

「戦争を風化させない会」の慰霊祭が軌道に乗った頃から、目標であった鎮魂神社の創建に向け動き出しました。

グラムでは、神社のような宗教的なものや政治（特に軍事）に関わるモニメントの建立には、地元民と知事・副知事の許可・同意が必要になりますが、地元の村長をはじめ民間人と政府関係者の真摯な協力により、グラムのシンボルともいえる政府敷地内に建てる認可が下り、平成29年7月9日に、グラム最大の激戦地アサン海岸の公有地に誠に小さいながら「グラム鎮魂社」を建立し、靖国神社の神職による斎行で落成式を実施することができました。

この式典には戦没者の御遺族、有志多数、グラム政府副知事等が立ち会い厳粛に実施することができました。

「グラム鎮魂社」の目的は、次のとおりです。



鎮魂社における慰霊祭（30年7月）



戦跡ツアー参加の高校生達

①先人の犠牲的愛国心を尊崇し、慰霊の誠を示すこと。

②先人の意志を現代に引き継ぎ、若者をして「国と先人を誇りに思える」ように繋ぎ、彼らによって希望ある社会を築き上げる精神的な指針となること。

五 戦跡巡りツアー

ジャングルでのトレッキングを重ねている間に、埋もれた戦跡を発見し、また、戦いで生き残った兵士の話を聞いている間に、生還兵たちの生々しい体験を代弁することに使命を感じるようになり、希望者にグラムでの戦争のあらましを語るようになりました。それが現在の「戦跡巡りツアー」です。

意外に思うかもしれませんが、ここでの戦争話は、日本の若者達に関心が高く、知ってもらいたい熟年・壮年層

は、ゴルフ三昧でまるで興味を示しません。

戦争否定、日本は戦争加害者という戦後史観の教育が浸透し、面倒な過去に興味を感じなくなってきたのが原因と思われます。

このツアーには、修学旅行生、会社員、自衛隊員など様々なグループから多くの人達が参加されます。

日本で学ぶことのなかった「あの時代」の実態を学ぶことにより、「目から鱗が落ちる」ように、将兵の祖国愛、犠牲的精神に感動して、感謝の気持ちを持つようになり、民間人犠牲者に対しても心から哀悼するようになります。

六 結言

グラム島を訪れる日本人は、年間62万人に達しますが、わずか70数年前に、我が国を守るために多くの日本軍将兵が戦没していることに思いを馳せる人はほとんどいないのが現状です。

いつの日か、「戦争を風化させない会」のささやかな活動が実を結び、国を愛し日本人であることを誇りに思う若者達が増え、御霊に会いに靖国神社に詣でるだけでなく、グラム島へ来島して、太平洋に没した多くの御霊が鎮座しているグラム鎮魂社に参拝する姿が流行することを心から願っています。

事務局からの報告

一 平成30年度「大東亜戦争全戦没者合同慰霊」の催行

(一) 慰霊式典及び直会

7月7日(土)、靖國神社において、当協議会が参加団体と共に挙行した平成30年度「大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」は、天候にも恵まれ、多くの会員の皆様のご支援、ご協力を得て無事終了することができました。大勢の皆様のご参列に心から感謝申し上げます。

また、今回も昨年同様全国津々浦々の皆様から、在宅参拝のご意向に添えて、玉串料及びご寄付をお届けいただき、戦没者慰霊に寄せる皆様のお心を強く感じました。ご芳志誠にありがとうございました。

当日は、来賓として村田信正靖國神社権宮司、山谷えり子参議院議員、館本勲武デリカフーズホールディングス(株)会長に、共催団体代表として赤星慶治水交会理事長、藤縄祐爾隊友会会長、外蘭健一朗つばさ会会長、寺島泰三英霊にこたえる会会長、堀江正夫東部ニューギニア戦友・遺族会会長はじめ多くの方に「ご参加いただき、盛会裡に式典並びに直会を実施することができました。

自衛隊からは、統合・陸・海・空各幕僚長代理にもご参列いただきました。式典参列者は168名、直会参加者は109名、在宅参拝者は77名と、ほぼ例年同様多くの方のご参加をいただきました。

式典では、奉納演奏で「世田谷男声カルテット ガバーガバ」と、堀田和夫・ともみ様にご奉仕・ご協力いただきました。

また、参議院議員の宇都隆史、佐藤正久、水落敏栄(日本遺族会会長)様から慰霊電・メッセージを賜りました。

直会は、靖國會館2階九段・玉垣・田安の間において終始和やかな雰囲気の中、戦没者に思いを馳せながら寛いでいただきました。

なお、平成31年度の大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭は、平成31年7月6日(土)に行う予定です。

多くの皆様のご参加をいただきますようお願い申し上げます。

(二) 主催団体

- ・公益財団法人 大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会
- (以下五十音順)
- ・公益財団法人海原会
- ・英霊の志を継承する会
- ・英霊にこたえる会
- ・エラプカ東京都人会

- ・公益財団法人 偕行社
- ・鹿児島偕行会
- ・神奈川県偕行会
- ・旧戦友連
- ・熊本偕行会
- ・熊本歩兵第225聯隊戦友会(永代会員)
- ・群馬偕行会
- ・NPO法人 国民保護協力会
- ・埼玉偕行会
- ・佐賀県偕行会
- ・NPO法人 JYMA日本青年遺骨収集団
- ・震洋会(永代会員)
- ・公益財団法人 水交会
- ・全国海洋戦没者伊良湖岬慰霊碑奉賛会(永代会員)
- ・全国近歩一会(永代会員)
- ・全国甲飛会(永代会員)
- ・全国ソロモン会
- ・全国メレヨン会
- ・一般社団法人 全ビルマ会
- ・ソ連抑留戦友遺族会東京ヤゴダ会(永代会員)
- ・公益財団法人 太平洋戦争戦没者慰霊協会
- ・公益財団法人 隊友会
- ・筑後地区偕行会
- ・公益財団法人 千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会

- ・航空自衛隊退職者団体 つばさ会
- ・一般社団法人 東京郷友連盟
- ・東部ニューギニア戦友遺族会
- ・特攻殉国の碑保存会(永代会員)
- ・公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会
- ・豊橋歩兵第18聯隊戦友会(永代会員)
- ・一般社団法人 日本郷友連盟
- ・ネービー21
- ・ハワイ明治会
- ・姫路偕行会
- ・福井県偕行会
- ・福岡県偕行会
- ・宮崎県偕行会
- ・山口県偕行会
- ・予科練雄飛会
- ・陸士第53期生会(永代会員)
- ・陸士第57期同期生会(永代会員)

二 業務・会計監査の実施

4月24日事務局において、平成29年度業務・会計監査を受けました。監査の結果、事業は適正に行われており、経理についても異常は認められませんでした。

監査人
・阿部 軍喜(公認会計士)
・藤原 博

三 平成30年度第1回通常理事会及び定時評議員会の開催

(一) 通常理事会

5月9日(水)、当協議会会議室において本年度第1回通常理事会を開催しました。

本会議では、事務局から提出された議案について熱心な討議が行われた結果、事務局案はそれぞれ原案どおり承認されました。

議案

- ①平成29年度事業報告
- ②平成29年度決算報告
- ③平成30年度評議員会の開催

(二) 定時評議員会

5月25日(金)、靖国会館において平成30年度定時評議員会を開催しました。

本会議では、事務局から提出された議案について熱心な討議が行われた結果、事務局案がそれぞれ原案通り承認されました。

議案

- ①平成29年度事業報告
- ②平成29年度決算報告
- ③平成30年度事業計画及び収支予算書
- ④理事の選任

出席者
評議員11名中11名が参加

四 慰霊諸団体連絡会議の開催

6月8日(金)、靖国会館において慰霊諸団体連絡会議を開催し、情報交換を実施しました。

議案

- ①厚労省が実施している慰霊事業の概要(厚労省派遣講師)
- ②参加団体の遺骨収集活動

- ・東部ニューギニア戦友遺族会
- ・全国ソロモン会
- ・JYMA日本青年遺骨収集団

五 硫黄島戦没者遺骨収集派遣への参加

今年度第1回派遣(6月26日～7月11日)に、偕行社から2名が参加し、北部の壕、滑走路脇の壕、西海岸を探索し25柱の収容に貢献されました。暑い中での作業本当にご苦労様でした。次回回は、9月～10月にかけて第2回派遣が予定されています。

六 慰霊祭等への参加

- ①4月1日(日)、靖国神社において第7回軍馬・軍大・軍鳩合同慰霊祭が行われ、圓藤理事が参加しました。

②4月21日(土)、比叡山において第2回大東亜戦争戦没者慰霊法要が行われ、島村会長と圓藤理事が参加しました。

③5月28日(月)、千鳥ヶ淵墓苑で行われた拜礼式に柚木理事長以下3名が参加しました。

④6月23日(土) 靖国神社において殉国沖縄学徒顕彰七拾弔年祭が行われ、伊藤理事が参加しました。

新入会員紹介(敬称略)

(H30・3・1・30・6・30)

賛助特別会員

一戸弥生 館本勲武

賛助会員

- | | | |
|------|------|------|
| 新井隆 | 石井和子 | 伊藤隆 |
| 江成雅子 | 川崎雅崇 | 國澤輝生 |
| 志賀政雄 | 田口庄司 | 鶴井博理 |
| 中村勝彦 | 西本唯信 | 野本純 |
| 林秀一 | 弘瀬好子 | 二場健児 |
| 細木和広 | 眞野礼二 | 水野和憲 |
| 山口勝 | 山下輝男 | |

残暑お見舞い

申し上げます

公益財団法人 偕行社

- | | |
|-----------|-------------|
| 会長 | 志摩 篤 |
| 相談役 | 富澤 暉 |
| 理事長 | 森 勉 |
| 副理事長 | 深山 明敏 |
| 副理事長 | 熊谷 猛 |
| 副理事長 | 白石 一郎 |
| 専務理事 | 奥村 快也 |
| 事務局長 | 若木 利博 |
| 公益財団法人 | 水交会 |
| 会長 | 齋藤 隆 |
| 副会長 | 吉川 榮治 |
| 理事長 | 赤星 慶治 |
| 専務理事 | 杉本 正彦 |
| 事務局長 | 長谷川 洋 |
| 公益財団法人 | 特攻隊戦没者慰霊顕彰会 |
| 会長 | 杉山 蕃 |
| 理事長 | 藤田 幸生 |
| 副理事長 | 岩崎 茂 |
| 専務理事・事務局長 | 石井 光政 |

平成30年度合同慰霊祭
参拝者及び寄付者名簿

相田 勲	青木 和子	赤木 智歩	武田 正徳	竹本 佳徳	館本 勲武
赤星 慶治	秋上 眞一	阿久津香奈子	田中みづき	田中 勇一	谷本 忠康
阿部 軍喜	新井 光雄	飯田 美絵	谷本 孜子	田村 奈央	千明八十次
池上 均	石井 光政	石垣貴千代	辻 外文	鶴田 俊英	寺澤 廣一
石川 不二夫	石田亜紀子	石塚 隆	寺島 泰三	富樫 利男	戸次 健三
板垣 裕	一戸 弥生	伊藤 隆	豊蔵 信夫	内藤 壽美子	中川 法宏
井上 達昭	岩田 司朗	植木美知男	中川 玲奈	永田 辰男	長峯精一郎
上原 喜光	宇佐美紀子	梅木 一美	中村 臺造	中村 弘	仲森 澄
宇都 隆史(代)	衛藤 晟一(代)	長谷川 洋	行方 滋子	西原 千鶴	西原 千江
圓藤 春喜	及川 昌彦	大澤 正幸	西原 和哉	二瓶 恵子	丹羽 真清
大穂 園井	大穂 孝子	大村 政義	野口 清秀	野口 健	野中 正一
大村 三輪	緒方 威	緒方 繁代	野口 彰夫	橋本 孝一	橋本 俊彦
岡部 博明	小倉 匠	角館 満弘	福田 正彦	福山 義人	服部 知己
掛水 敬太	金子 敬志	柄沢 健史	外園健一朗	細川かおる	原田 太郎
荻谷 登	川村 京	菊地 正一	堀田 和夫	堀田ともみ	福井 正明
菊池 正通	北嶋 颯太	國澤 輝生	前原 清隆	牧内 達哉	藤縄 祐爾
久野 潤	窪田 清之	熊谷 猛	正本 禎亮	松本 幹	堀江 正夫
倉形 桃代	古賀 英松	小島 健二	宮内 明乃	三宅 孝	本田 真琴
小島 陽三	後藤由美子	小長谷文晴	武藤 孝行	森 充	森田 茂生
小林 武一	駒場 幸太	斎藤 文彦	森田 次夫	森本 浩吉	守谷銀次郎
酒井 省三	佐藤 慎二	塩田 昌司	柳澤 壽昭	柳下 進	山口 章
志賀 政雄	島村 宜伸	清水 悟	山口 美朝	山崎 文夫	山下 輝男
神保 明生	杉澤 敬子	杉澤 英雄	山下 肇	山谷えり子	山本 康正
杉山 蕃	住田 陸快	瀬尾 広大	山本 仁	山本 洋	柚木 文夫
関口 幹久	高崎啓一郎	高橋 静	吉岡 秀之	吉岡 知佐	吉岡 弘祐
高橋 義洋	竹下 泰義	武田 功	若木 利博	涌井 慎一	涌井 則子

平成30年度合同慰霊祭
在宅参拝者及び寄付者名簿

(世田谷男声カルテット
ガバーガバ4名
(以上合計168名))

阿部 敏行	安藤 義雄	井 渴 昭二
石田 和夫	石橋 聡	和泉 永一
市川 雄一	市来 徹夫	井上 敏明
井本 尚宏	伊谷野尊裕	上田 全喜
上田 愛彦	上野 保則	宇佐美 寛
海老原富美枝	小田原健児	小沼 愛
川田久四郎	衣笠 陽雄	工藤 重民
熊谷 國彦	熊代 将起	小島 啓三
齋須 重一	作左部 貢	佐久田昌昭
色摩 力夫	清水 典郎	下山 甲子男
新郷 勝亮	杉原 清之	鈴木 光夫
曾我 睦郎	宅野成人郎	武田 健策
田中正和	田村 祐茂	津田 治男
百目木 清	内藤 壽美子	中村 登
西嶋 正幹	橋本 光彦	橋本 亀
畑 斗志夫	島間 成允	花村 龍男
早瀬 登	早田 亮彦	東田 政尋
藤嶋 弘行	前田 暢彦	真方 侃
牧 勝美	丸橋 安夫	三浦 誠哉
水内 三郎	溝越 正信	三春 仁
宮井 照子	宮澤 作太郎	八木 啓太

公益社団法人 隊友会

会長	藤縄 祐爾
理事長	先崎 一
常務理事	増田 好平
常務理事	吉川 榮治
常務理事	片岡 晴彦
常務執行役	久納 雄二
事務局長	植木 美知男

航空自衛隊退職者団体

つばさ会

会長	外園 健一朗
副会長	片岡 晴彦
副会長	溝口 博伸
副会長	戸田 眞一郎
副会長	片山 隆仁
副会長	鹿股 龍一
専務理事	若林 秀男

一般社団法人 日本郷友連盟

会長	寺島 泰三
副会長	森 勉
専務理事	新井 光雄
常務理事	勝木 俊知
常務理事	越智 道隆
事務局長	富田 稔

安富 東洋 山口 淨秀 山口 勝
山口のぞみ 山田 健雄 吉岡 信夫
吉川 洋利 吉田 治正 吉田 三郎
若月 良介 和才 誠 渡邊 秀光
(以上合計77名)

機関紙「慰霊」の合版号発行

機関紙「慰霊」は、例年、4月、7月、10月、1月に発行しておりますが、諸般の事情から、本年度も、7月号、10月号の合版号として9月発行と致しました。ご了承下さいますようお願い致します。

「寄稿」のお願い

当協議会は、広報誌「慰霊」を、年3回(1月、4月、9月)に発行しています。各団体及び会員の皆様の積極的な寄稿をお願い申し上げます。原稿は、手書き、ワープロ、パソコン作成のいずれでも結構です。関連の写真等がありましたら努めて添付をお願い致します。

記事の訂正

「慰霊」43号2ページに、「帝国政府声明」の宣言が12月9日となっていますが、12月8日の誤りです。訂正をお願いします。

会費納入のお願い

当協議会の活動は、会員の皆様の会費・寄付金等の浄財で成り立っております。

平成30年度の年会費未納の方には、「慰霊」44号に払込取扱票を同封しておりますので、会費納入にご協力をお願いします。

寄付金の税額控除に係る領収書等の送付について

当協議会は、租税特別措置法に基づく税額控除対象法人に認定されております。

従来、5000円以上の年会費・寄附金を頂いている方に領収書及び証明書(写し)を送付しておりますが、本年度も同様の処置をさせていただきます。なお、本送付は、12月中の発送を予定しておりますので、ご了承下さい。

また、5000円未満の方でも、確定申告にあたりこの領収書及び証明書(写し)をご希望の方は、ご遠慮なく電話等で事務局までお申し出下さい。

当協議会会員入会のご案内

当協議会は、民間有志の会員の皆様からお寄せいただく貴重な会費収入を頼りに、戦没者慰霊の事業を運営しております。

この国の大東亜戦争戦没者慰霊事業の永續と充実を希う多くの皆様の、当協議会会員へ加入を心からお待ち申し上げます。

既加入会員の皆様には、お知り合いの方の新規入会勧誘に、格別のご協力を賜りますようお願い申し上げます。会員の区分と年会費は次の通りです。

- 一 賛助会員
(本会の趣旨に賛同する個人)
年会費 三〇〇〇円
- 二 賛助特別会員
(特別御芳志の賛助会員)
年会費 五〇〇〇円
- 三 正会員
(本会の趣旨に賛同する慰霊目的の法人・団体)
年会費 一〇〇〇〇円
- 四 特別会員
(本会の趣旨に賛同する法人・団体)
年会費(一口) 一〇〇〇〇円
(二口以上)

残暑お見舞い 申し上げます

公益財団法人

大東亜戦争全戦没者

慰霊団体協議会

会長 島村 宜伸
理事長 柚木 文夫
専務理事 圓藤 春喜
事務局長 伊藤 隆

株式会社 SNA
株式会社 キャリア
コンサルティング

軍学堂

医療法人社団 伍光会

株式会社 再生日本21

株式会社 青林堂

特定非営利法人 孫子経営塾

同台経済懇話会
株式会社 リエイト